

No.4

発行日 2007.2.24

神奈川大学教職課程指導室

学校ボランティア通信

戸塚中学校でのボランティア活動

内容：

◎ 戸塚中学校でのボランティア活動

松岡倫代
穂本涼平

◎ 子どもから学ぶ

下橋史明

◎ A Tから気づかされたこと

足立健一

私たちが横浜市立戸塚中学校での学校ボランティアに参加することになったきっかけは、教職課程の入江先生からの紹介でした。私たちは、1年生の時から違う場所で学校ボランティア活動を行っていました。今までは小学生としか接したことがないので、中学生と接するいい機会になると思い、活動を始めました。

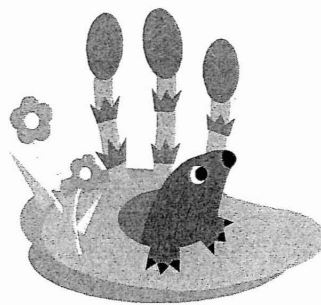
私たちは、毎週水曜日の8時20分から12時まで、保健室登校の生徒の学習サポートをすることを主な活動としています。他にも、校内にある掲示板の整備や廊下の清掃も時々やっています。

活動を始めてからまだ日が浅いのですが、実際に活動してみて気が付いたことは、自分勝手なイメージで『保健室登校の生徒は接しにくい』と思っていたことです。私たち自身が保健室登校の経験がなく、『保健室登校』と聞くどうしてもマイナスイメージが先行してしまい、最初生徒たちに会うまでは、どうやって接したらいいのか不安でいっぱいでした。しかし、実際に会って見ると、どこにでもいるような中学生でした。大人とは人間関係がつかれるが、同年代との人間関係が難しい生徒が保健室登校になりやすいような感じがしました。保健室登校の生徒

経済学部経済学科 3年 松岡倫代
法学部法律学科 3年 穂本涼平

たちと話していると、クラスにいる生徒よりも精神年齢が高いように感じることもあり、その辺のギャップもあって人間関係が難しくなっているのではないかと感じました。

まだ、私たちがどのような役割を果たしていけばいいのか手探り状態ですが、毎週が発見の連続です。生徒たちにとって、この場所がどのような場所であるべきなのかを考えながらの活動ですが、教員志望の私たちにはとても勉強になる場所だと思います。是非他の人も参加して欲しいと思います。



子どもから学ぶ

経済学科4年 下橋史明

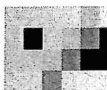
私は現在、浅間台小学校へアシスタントティーチャーとして通わせて頂いています。通い始めた当初は、子ども達とのように接したらよいか分からず、戸惑ってしまいました。それまで教育実習や、他のボランティア活動で中学生と接することが多かったのですが、その経験をいかして小学生の子ども達と接しようとしたのですが、中学生とくらべ、まだ幼さの残る小学生の子どもたちには、あまり通用しなかったように思います。特に低学年の子ども達と接する時には、朝の会での挨拶から戸惑ってしまいました。そこで、浅間台小学校の先生方の子ども達との接し方を参考にするようになりました。

私がそこで学び、注意していることは丁寧な言葉、分かりやすい言葉ではっきりと話すことです。そして子どもと接する時は、常にこちらが冷静でいるということです。これは次のような経験から学んだことです。私が以前1年生のクラスを担当していた時に、2,3人の生徒が喧嘩をしていたことがあり、それを見た私は頭の中ですぐに喧嘩を止めなければいけないと思い、大きな声を出して注意をしました。しかし、その場で喧嘩が収まっても、目を離すとまた喧嘩が始まってしまいました。また、授業中に教室を抜け出してしまった生徒がいた時に、早く教室に戻さなければいけないと思い注意をしたのですが、こちらも私が目を離すと、また教室を抜け出してしまいました。この出来事を今になって振り返ると、私が焦ってなんとかその場を鎮めようとしていただけであったのだと思います。私が冷静さを失ったためにその場は鎮めることが出来ても、その後の指導に繋げることが出来なくなっていたのです。

先生方の注意の仕方を見ると、生徒の目線で冷静に言葉を選んで指導を行って

いました。そして生徒もきちんと納得し、先生がいなくなっても同じことはやりませんでした。そこで私は、教師という立場だけでなく大人として子ども達と接するときには、常に冷静さを持って子どもの目を見て接すること、また子ども達の手本となるような言動を心がけていくことが大切であるということも、学びました。子どもたちは、親や学校の教師など自分の周りにいる大人を、私たちが思っている以上によく見て、時にはまねをしながら育ってきます。私自身もアシスタントティーチャーとして学んだことを、将来の職業の場だけでなく日常生活においても実践していけるよう努力していきたいと思います。





No.4

ATから気づかされたこと

神奈川大学外国語学研究所博士前期課程英語英文学専攻
200670036 足立健一

私は、今年の2月13日よりアシスタント・ティーチャー(AT)として、栗田谷中学校でボランティアをしています。きっかけは、1月に神奈川大学で行われた学校ボランティア体験報告会を聞いたことからです。私は、これまでに三回ATとして栗田谷中学校に行きました。確かに、まだ始めたばかりなのですが、毎回大きな収穫を得て学校をあとにします。ここでは、非常に緊張した初日の出来事の中で、特に、印象に残ったことや自分の教職志望の気持ちますます強まった経緯などを簡単に触れてみたいと思います。

初日は、教職員の方々への挨拶がありましたので、だいたい朝の8時ごろ学校に行きました。私は、ひどく緊張していました。なぜなら、このATとしての経験から自分の教職志望への気持ちが強まるか、あるいは、弱まるか大きな影響を受けるだろうという、言いようのない不安で頭がいっぱいだったからです。そのような不安のなか、まず、これからお世話になる先生方に簡単に自己紹介をさせていただきました。次に、その日はちょうど朝会があったので、私も一緒に朝会に参加させていただきました。体育館には、まだ生徒がわずかしか来ていませんでした。しかし、時間が経つにつれ、ぞくぞくと生徒達がやって来ます。私は、体育館の前で教務主任の安部先生と共に生徒がやって来るのを見ていました。そのため、生徒達も体育館に入るとき、私のほうをジロジロみていました。このことが、さらに私の緊張度を高めました。ところが、この不安を取り除いてくれたのも生徒達であったと思います。つまり、中には、私に対し、挨拶をしてくれる生徒も何人かいたからです。とはいえ、その後、全校生徒が体育館に集合したときは、さすがに足がすくみました。安部先生からは、「度胸試しに前で挨拶

しますか?」と聞かれましたが、「いや、無理です」と私が懇願したので、なんとか全校生徒の前での挨拶は免れました。

私は、2時間目の2年1組の英語の授業に初めてATとして参加しました。教科担任の堀口先生からは、「まず、英語で自己紹介をしてください」と言われたので、始めに、教壇に立って英語で自己紹介をしました。だいたい35名ほど生徒がいて、彼らが一斉にこちらに眼差しを向けて耳を澄ませている光景は、はじめこそ緊張しましたが、だんだん話していくうちに楽しくなってきました。というのも、生徒の中からの反応が、私の拙い英語での自己紹介を励ましてくれるからです。例えば、「私の趣味は映画を観ることです」というと「オー」とか、あるいは、「中学生のとき卓球をしていました」と言う一人の生徒が別の生徒に「お前と同じじゃん」などのように、私の話に反応してくれたので、私は「自分の話をしっかり聞いてくれているんだなあ」という安心感を得ることができました。その後、生徒の方からの質問が始まりました。前回の授業で学んだ“Are you interested in ~?”を使った質問でした。質問される時、私は、一人ひとりの生徒の目を見ながら聞きました。そうされると、生徒のほうも緊張が取れるのか、こちらに目をキラキラさせて質問してきます。私は、そのとき、この子達の目の輝きを失わせてはいけないと強く思いました。授業中、私は、前のドア付近にたつて、ずっと先生が授業をされているのをお手伝いするというより、見学している状態でした。授業が終わったあと、何人かの生徒が私のもとへ来て、いろいろと話しかけてくれました。私はそのことがとても嬉しかったです。

その次に出るはずだった英語の授業が変更されてしまったので、私は、先生からの薦めで、英語以外の授業を見学させていただくことになりました。後方のドアから授業の様子をうかがうことができるので、1年生の授業を覗いていました。たまたま、1年3組のクラスに後ろのドアから入ると、生徒のほうがざわつききました。その中の一人が「こんにちは。僕の横の机空いてるから座ってください」と声をかけてきました。そうすると、周りの生徒も「どうぞ!」と一斉に言うので、横の席に座ると「やった!」と隣の生徒が笑顔で言ってくれるのを聞き、私も自然に笑みがでてきました。そんなわけで、一緒に授業を生徒として受けることになってしまいました。しかも、その授業は家庭科で、包丁の使い方についてだったので、私は全然分からず、ちょっと恥ずかしかったです。授業が終わってから、また何人かの生徒が来て、「一緒にお昼食べようよ」と誘ってくれました。私が、「今日は弁当持ってきていない」と言うと「じゃ、下の売店で買ってきなよ」と言われ、とっても嬉しかったです。このような元気な子どもたちに触れると、私が中学生だったときのことを自然と思い出させてくれるようでした。結局、その日は用事があったので帰りましたが、非常に爽りある体験でした。

初め、私はこのATを引き受けたことに大変な不安を抱いていました。もし、このボランティアから子供たちに触れることの喜びを感じ取ることができなかつたら、自分は教師に向いていないだろうと自覚する契機になるからです。しかし、この不安は取り除かれました。自分でも気付かなかつたほど、自分は子どもが好きであることに気がきました。実際、私が受けたときの家庭科の先生は、授業後に、「子どもたちとあんなニコニコされて話されているなんて、足立さんは子どもが本当に好きなんです」と指摘され、続いて「隣に座っていた子は足立さんに甘えていてかわいかったですね」とも言われ、改めて自分の感じたことを認識させてくれました。

このように、何か新しいことに挑戦することは勇気のいることですが、そこからは必ず自分の人生を決定付ける出来事に遭遇するという点で、とても大切なことだと強く感じました。もし教師になろうか悩んでいる人がいれば、まず、このATを経験してみることがいいと思います。この経験から、自分は本当に教師になりたいのか決めることができると思います。私は、ATを通して、まず、自分が子どもが好きであること、次に、ぜったいに教師になろうという二つのことを確信することができました。今回、このようなことを体験させてくれた栗田谷中学校および神奈川大学教職課程の先生方に心より感謝しています。



**神奈川大学
教職課程指導室**

電話：045-481-5661 (内線4228)
FAX：045(413)4154 E-mail: educ@kanagawa-u.ac.jp